

仏教の現代的意義と池田博士の行動

M・I・ヴオロビヨワ¹デシヤトフスカヤ
佐藤裕子 訳

二日間にわたり、十三本の興味深い発表を聞くことができました。それはお互いに関連のない個別のものではなく、一貫した基本理念を提示しました。この基本理念を、「道徳的哲学的教義としての仏教」「現代世界における仏教団体の地位と役割」と簡潔に特徴づけることができるでしょう。

私たちが仏教発祥とその広まりの歴史を詳細に研究すれば、紀元一世紀にはすでに仏教がその発祥の地であるインドの国境を越え、北方、東方や西方へ急速な動きを始めたことがわかるでしょう。インド、アフガ

ニスタン、ビルマやインドシナ、オセアニア諸島、中央アジア、チベット、中国、日本は、仏教と、仏教に伴うインド文化の影響下にありました。西洋では、仏教はシルダリヤ川とアマダリヤ川の間土地まで広まり、そしてかの地で紀元八世紀にアラブの侵略で地位を失いました。

現代に目を向けてみましょう。上述した地域の多くで仏教信仰が続いています。しかし、それだけではありません。仏像と尊崇の教えは、東欧と西欧、アメリカにとってすら魅力的なものであったのです。たしか

に仏教は、こうした大きな領域において、ごくわずかな部分しか占めていなかったのですが、現在では、古代と同じように、こうした地域で布教者たちが活動しており、仏教に対する関心の高まりを見れば、彼らの活動の強化と発展には疑いもなく将来性が見込まれるのです。

他民族世界の住人は、仏教のどこに惹かれているのでしょうか？ ヨーロッパやアメリカの仏教布教者たち、それは黄色や赤の僧服を着て、手に鈴を持った僧侶ではありません（そのような僧に出会うことはありませんが）。第一に、それは仏教文献と釈尊の教えに大変よく精通している人間や仏教団体に代表されます。団体は、精神的、物質的救済を求めてやって来る者すべてを援助します。西方および東方に数多くいる貧しい子どもたちのために学校が設立されています。大事なものは、世界の大多数の人々にとって重要なもの、それは平和であり、戦争がない状態だということです。川田洋一所長が論文の中で述べられているように、仏教団体は、平和を守り支える点で有益な役割を担っています。爆

破やテロ行為により、ますます頻繁に揺らいでいる不安に満ちた私たちの世界で、仏教は平和を守り保障することに大きく貢献している基本的思想なのです。

釈尊の教えに注目し、それが、古代インドの神話であり叙事詩の『マハーバータ』に現れる神々への信仰と何が違うのか示してみましよう。神々は魔族たちと常に戦い、内紛を起こし、その行動においては道徳的に特別優れているとはいえません。彼らは、戦争の必要性を論じ、クシャトリアの義務は戦うことであると説明します。『マハーバータ』の中で神々は、戦闘の両陣営の相談役として登場し、まさにその助言が、一つの種族による別の種族の壊滅へと導くのです。流血、殺戮、殺人をもたらす最強の武器の描写、これが、我々が目にするバラタ族の子孫の戦いです。クリシュナ神は戦うひとつの種族の元帥として登場します。

一方、多くの経典の中で釈尊は、地方政治の政治的助言者として登場しています。しかし、釈尊の時代には、釈尊が関与したり、釈尊の承認を得た戦いはひとつも起きていません。もちろん、インドは敵を防ぐ必

要がありました。積尊の教えは、政治的安定と地上の生命の保護を呼びかけていました。仏教が地上の平和を揺るぎないものにするための大きな力の源泉である現代にあつて、主要な強国やその指導者たちは仏教を過小評価し、十分な関心を向けていないと思います。今回のシンポジウムの記録が出版されるならば、政治家や政治団体の関心を引くに違いありません。

このように、平和を愛する心、それは、仏教誕生の瞬間から、仏教に本質的に内在する要素であるのです。

インドに暮らす諸民族間の社会的不平等、神々により支えられているカースト制度の発達といった状況において、積尊と同じ人物が現れる、『マハーバーラタ』第六巻の人気の場面である『バガヴァッド・ギーター』を例として取り上げましょう。積尊は、人々の平等のために立ち上がり、人々に精神的生括様式を守るよう訴えました。「教義擁護のための」仏教教団には、あらゆるカーストや社会各層の人間が入ることができ、彼ら全員が平等であり、精神的生括を送ったのです。

善と愛、人間への尊敬の理念をもつ仏教は、人権を

守る現代の運動の真の支柱です。現代に最も大切なのが、道徳的、精神的問題に関する仏教の立場です。仏教は民族や人種的特徴によって人を分けません。さまざまなタイプの凶暴な民族主義と、それに結びつく暴力に反対します。その他の多くの点でも、仏教は人々を結びつけ、憎み合いや敵意の応酬とは正反対の位置にあります。積尊は人々がお互いに尊敬に満ちた関係を結ぶよう呼びかけました。『法華経』の第二十品を思い出しましょう。その中で積尊は弟子たちに、不軽菩薩の説話を語っています。不軽菩薩は、出会う人すべてに敬礼し、「私はあなたを深く敬います」と語りました。人々は彼を変人として嘲笑し、腹を立て、石を投げつけました。しかし菩薩は彼らに叫んだのです。「私はあなたを深く敬います」と。

積尊とキリストの教えは、十戒だけでなく、行動や振る舞いにおいてもたいへん似ています。思想的・政治的に攻撃的な動きが、私たちの眼前で、社会を第三次世界大戦に巻き込みつつある今、両者は共に、たいへん重要で大きな精神的な力であるのです。池田大作

先生が宣言された新しい人道主義の広まりは、地上の平和を守るために大きな役割を果たしています。今回のシンポジウムで、私たちの同志である日本の東洋哲学研究所の研究員の方々の學術構想が紹介されました。それは、仏教と平和、仏教とキリスト教、仏教と人権、仏教と女性の地位といった、現代の最重要な諸問題です。これは、人間にとって切実かつ大切な問題点です。

地球のエコロジーもたいへん重要です。有害物質、石油やその他の化学物質の大気への絶え間ない廃棄、河川や海の汚染、森林破壊と森林の住人である野生動物や鳥たちの残酷な殺戮、こうしたことすべてが、人間の健康に暗い影を落とし、労働能力を失わせ、寿命を縮めているのです。もちろんこれは新しい現象であり、釈尊やキリストが、正しく正直で清らかな生活を人々に説いていた時代には無かったことです。しかし、釈尊やキリストの教えは、大地に善き種を広げました。それが私たちの時代に、現代の信徒たちやキリスト教徒たちの布教の中で芽を出し、最も困難な状況を生き抜く一助になっているのです。多くの經典の中に、

自然や、私たちの周りの世界および仏教の聖地に対する思いやりに満ちた態度の説話が見られます。いくつかの例を挙げましょう。『金光明經』の中では、流水長者の寓話が語られています。彼は、貯水池が干上がったため、水無しで残された十万匹の魚を救いました。彼は百匹の象を集め、その上に水の入った容器を積み、貯水池を満たしました。しかし、それだけでは足りません。魚たちは飢えに苦しみ、流水長者に襲いかかったのです。そのとき彼は再び魚に合った食料を象に載せ、魚たちに腹一杯食べさせました。同じ『金光明經』には、統治者の王子である菩薩が、子どもが生まれた空腹の虎に自身の身体を与えています。母親の虎は、すっかり弱っており、生まれたばかりの子どもを食べるといふ、恐ろしい罪を犯すところでした。菩薩は母も子どもたちをも救ったのです。多くの本生譚（釈尊の前世譚）には、隠者が、さまざまな手練手管に訴えながら、木こりの斧から素晴らしい木々を守った物語が挙げられています。

十九世紀の偉大な学者、啓蒙思想家、人道主義者た

ちは、女性への必要な敬意が欠けている国家を、文明国家と呼ぶことは決してできないと断じています。長い間釈尊は、仏教教団への女性の受け入れを許可しませんでした。アーナンダや釈尊の叔母プラジャーパティや他の女性たちによる説得は、女性も清浄で慎ましい生活を求めていること、成仏する価値のあることを示しました。三藏内のひとつの經典全部（『テーリーガーター』）が、自身の仲間の僧侶たちとの哲学論争に勝利し、仏教教義に通曉した、才能豊かな女性の仏弟子たちに捧げられています。女性は成仏できるかという問題は、肯定的に解決されています。『法華経』の中には、娑竭羅龍王の娘が、生きながら教へのすべての段階を経て成仏した話があります。私は日本で、仏教団体の女性たちと出会いました。彼女たちの謙虚さと優雅さ、釈尊の教義のさまざまな側面に関して私に出された深い質問とその知識に、たいへんな満足を得ました。

ここで仏教文献と仏教哲学を研究する学問である「仏教学」へ目を向けてみましょう。ロシアでは学問に對する経済事情のため、仏教学は、本来、世界の人文

科学の中で占めるはずであった「世界文明における仏教の客観的役割を研究する学問」という地位を得ることができないのです。思想の複合体としての仏教の人道主義的役割に、百年前に注目したのが、ロシアの偉大な仏教学者であり哲学者のF・I・シエルバツコイでした。私たちにとってたいへん残念なことに、ソビエト時代のロシアに存在した体制は、彼と彼の弟子たちに、その才能すべてを発揮させることを許さなかったのです。ですが、ご承知の通り、実り多き思想が跡形もなく消えてしまったものではありません。ソビエト連邦でのペレストロイカが始まる前に、当研究所ではとても若い人々が、シエルバツコイにより始められた研究の継承に乗り出したのです。私は、E・P・オストロフスキーとV・I・ルドイのことを言っています。彼らは、世親の著書『俱舍論』の本格的な学術的翻訳と解釈に携わりました。この文献は、仏教の真正正銘の百科事典です。『俱舍論』の研究を基盤に、二十年間で彼らにより書かれたのが、仏教の基本思想に捧げられた莫大な量の書物です。その研究のいくつかの成果

が、本日私たちのシンポジウムで紹介されました。彼らはシエルバツコイの伝統を継承しながら、仏教学研究の今後の発展のために、才能ある者たちを探し教育することをやめなかったことを申し述べたいと思います。教え子や同志たちが彼らに加わってから現在まで、当研究所では最も権威ある仏教学派が形成されてきたのです。彼らの指導に従って学位論文を書き学位審査に通ったのが、仏教の古文書の研究を継承しているサファラリ・シヨマクマドフです。本日彼は、ロシア仏教学にとって新しいテーマである、十三世紀の日本の仏教者・日蓮の仏教革新に関して意見を述べました。『法華経』の学問研究の始祖と考えられる日蓮から、この真に稀有な経典のテキストの現代的研究への橋を私たちは架けているのです。この経典の七―八世紀のほとんどすべての写本が、私たちのコレクションに保管されています。それは海外での展示会に何回か出展されました。仏教において多くの未解決の課題が残っていますが、その解決のための主要な典拠となりうるのが『法華経』であると考えられます。私たちのシンポ

ジウムで、『法華経』を基盤とした在家の道徳的規範の分析の試論を発表したのが、当研究所の仏教学グループの精力的な研究者であるT・V・エルマコワです。

当研究所の極東室長であるA・S・マルティノフの学術的洞察力を十分に評価しなくてはなりません。彼はその学術人生すべてを、中国の政治イデオロギーの歴史の研究に捧げました。その分野の数少ない一人として彼は、儒教の研究に引き続き集中して取り組んでいます。彼は、中国における儒教とその文化の歴史的役割をたいへんよく認識しています。今回のシンポジウムで聴かれたマルティノフの論文の中で、儒教は人類の文化史にユニークな地位を占めていることが明確に示されました。儒教は、仏教やその他のイデオロギーに影響を与えただけではなく、その影響を受けて儒教自身も一定の変化を遂げていたのです。歴史的な過去の儒教、そして今日におけるその役割——これは学術研究にとって重要なテーマです。

私たちが本日詳しく触れた、仏教、キリスト教や儒教は、こう表現するのが許されるなら、「人間が人間化

する」ための重要なファクターであるのです。

すでに私が少し触れた、もう一つの重要な側面に言及する必要があります。池田大作先生の功績は、博士が仏教経典に基づき、現代の人道主義の理論を構築したことだけではありません。これは、「新しい人道主義」の理論なのです。そう呼ぶほうが正しいと思います。周知の通り、人道主義は、ルネサンスの現象として、文化の主要な対象が人間であるとする思想として起りました。時代が変わり、積尊が呼びかけた人道主義も、新しい状況で新たな特徴を帯びているのです。それは、他者への人道的態度だけでなく、人間の生活のための人間的な環境の樹立、テロリズムや戦争から人類社会を守ること、学び、働き、休息のとれる機会を社会に提供することです。マクシム・ゴークリキーは、戯曲『どん底』の中で、一人の登場人物の口から、「人間——なんと誇らしく響くことだろう」との言葉を言わせています。池田大作先生は、「人間であること」を誇らかに述べています。人間の中に、「未来の積尊」のモデルを、善と正義の新たな社会の創造者を見ている

からです。

最後に、東洋哲学研究所および当研究所との間に開始された建設的協力は、形式的なものでなく、意義ある学術的事業であると申し上げたいと思います。今後このようなシンポジウムが頻繁に行われ、現代仏教学の発展に重要な役割を果たしていくと思います。長期計画を立て、それを実現してこそ、東洋学術界の注目を集めることができます。

(M・I・ヴォロビョワIIデシャトフスカヤ／ロシア科学

アカデミー東洋学研究所研究員)

(訳・さとう ゆうこ／東洋哲学研究所委嘱研究員)